うんなん観光ネットワーク協議会
（雲南広域連合）
〒699-1311 島根県雲南市木次町里方 1100-6
TEL 0854-47-7341 ／ FAX 0854-47-7344
https://kankou.unnan.jp

Facebook 雲南広域連合 Unnan Wide Area Union
Instagram @unnan_area
Twitter @unnankouiki

2021年3月 発行

うんなん

神話と鉄の源流

The Cradle
Origins of mythology and steel

Issue area
—
Shimane
Unnan / Okuizumo / Iinan
Image Book

TAKE FREE

万物に神が宿るとされる日本古来の考え方は、
さまざまな神話となり、それが文化へと発展した。
ここ雲南の地においても独自の発展を遂げ
現代に息づいている。

うんなん

神話と鉄の源流

The Cradle
Origins of mythology and steel

古来、自然とともに生きてきた人々は、人智を超えたさまざまな現象に恐れと畏れを抱き、それを「神」と呼んできました。その経験は「神語り」として代々語り継がれ、そして「神話」が誕生しました。
「倭」から「日本」へと移り変わった1300年前の奈良時代、国家の成り立ちや天皇の正当性を示すため、『古事記』や『日本書記』が編さんされました。両書には、八岐大蛇（やまたのおろち）退治などの「出雲神話」が記されており、神話の舞台となった雲南地域は広く知られることとなりました。
また、出雲の神々を主人公として地名の由来を語った『出雲国風土記』も今に伝わり、1300年前の出雲の地で、出雲の人々の目線で語られた神話が数多く収められています。
なかでも雲南地域は、山の名の由来が語られてきた特別な場所です。山とそこから流れ出す川の脅威や恵みの中で生きてきた雲南の人々は、山に神が宿ると信じ、神の姿をそこに見ていました。
自然の中に神を感じた人々は、やがて神をまつる社、「神社」を生活の場に設けます。神社では、地域の歴史として神話が語られ、子孫に受け継がれていき、祭りの場では、恵みと守護の祈りとともに、神を喜ばせようと地域の特産物や芸能も捧げられました。神社は人々の営みの中心にあったのです。
人びとの叡智と力は、さまざまな文明を生み出しましたが、それは自然の恵みがあってこその産物であることを、私たちは知っています。例えば、山や川の砂鉄を原料とし、山林を木炭燃料とした「たたら製鉄」では、鉄づくりの守り神として金屋子神が信仰され、各地に神社がつくられてきました。そして、自然と文化を生んだたたら製鉄は、棚田や特産品などの新たな「文化」を生み出しました。このように雲南の人々は、先人の守り伝えてきた神話や歴史を胸に、豊かな自然と文化を未来に紡いでいるのです。

吉松 大志

INDEX

01〜 うんなん 神話と鉄の源流
03〜 神話から読み解く雲南地域
07〜 神話とともに暮らす人々
09〜 体験スポット
11〜 八岐大蛇伝説／琴引神話
13〜 たたら製鉄から読み解く雲南地域
16〜 たたら製鉄に由来する 奥出雲の資源循環型農業
17〜 自然とともに暮らす人々
19〜 体験スポット
21〜 掲載施設一覧／アクセス

飯南町 大万木山（おおよろぎさん）の林道から見た山並み

神話、それは壮大な神々の戯れ。
古の神々が出会い、結ばれ、育まれた大地で、
連綿と人々は暮らしをつむぐ。
神話の鼓動が今も感じられる雲南地域。
古代の書物を読み解きながら、神々の物語に触れる旅へ――。

Birthplace of Japanese Mythology

神話から読み解く雲南地域

『古事記』
（島根県立古代出雲歴史博物館 所蔵）

『出雲国風土記』
（日御碕神社 所蔵、島根県古代文化センター写真提供）

『日本書紀』
（島根県立古代出雲歴史博物館 所蔵）

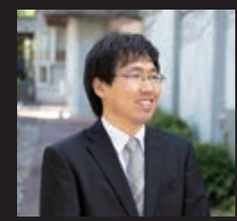
『古事記』、『日本書紀』、『出雲国風土記』は、いずれも約1300年前に編さんされましたが、書かれている内容は大きく異なり、それぞれを読み解くことで、古代の様子をより深く知ることができます。
『古事記』は、神々が活躍する神代という時代から第33代推古天皇までの神話や伝承をまとめた日本最古の歴史書です。神話の3分の1を、出雲を舞台とした出雲神話が占めており、日本のはじまりにおいて出雲神話を重要視していることが分かります。
『日本書紀』は、『古事記』と同じく、神代から第41代持統天皇までの神話や歴史を記した歴史書ですが、出雲神話はほとんど登場しないのが『古事記』と大きく異なる点です。しかし、そんな『日本書紀』にも、出雲が舞台の八岐大蛇（やまたのおろち）伝説は記されています。
そして、『出雲国風土記』は、『古事記』や『日本書紀』のような歴史書とは異なり、出雲国内各地の地名の由来、山河の様子、交通の状況などを細かく記録した「地誌」と呼ばれる書物です。風土記は全国でつくられましたが、多くが消失したり、一部がなくなったりしていて、完全な形で残っているのは唯一、出雲国の風土記だけという、とても貴重な資料です。
また、『出雲国風土記』には、『古事記』や『日本書紀』にも通じる地域に根差した神話伝承も記されており、『出雲国風土記』に多く登場する雲南地域を巡ることで、古代から今につながる神々の息づかいを間近に感じることができます。

雲南市 八重滝から続くゆるやかな清流

雲南市 斐伊川堤防桜並木

奥出雲町 鬼の舌震

話してくださった方



島根県古代文化センター
主任研究員
よしまつ ひろし
吉松 大志 氏

雲南地域は『古事記』・『日本書紀』の神話の伝承地がたくさんあり、歴史ロマンを感じられる格好の舞台です。また『出雲国風土記』には他にも面白い神話が数多く収められており、今にのこる遺跡や景観はその魅力をさらに引き立てます。

『古事記』や『日本書紀』では語られない神話に触れる今も残る地名に刻まれた神々への想い

空を割くように走る光、大太鼓を力いっぱい打ち鳴らしたように響き渡る音――。雲の間で起こる放電により発生する雷は、現代では、その発生のメカニズムを科学的な根拠により説明することが可能ですが、古代の人々にとって、突然の稲光や雷鳴がなぜ起こるのかを正しく理解できませんでした。特に、古から稲作をはじめとする農耕や漁などを通じて、自然と深く関わりながら生活してきた日本人にとって、雷や台風、日照りなどの自然現象は脅威でした。人の理解の及ばない出来事は「神の御業である」と考えられていたため、雷は「神が音を鳴らしている」という意味から「かみ・なり」と呼ばれるようになりました。

また、人々は、清浄な山や静かに佇む巨岩、生い茂る木々、荘厳な滝といった、あらゆる自然物にも神の存在を感じ、祀っていました。その数と種類の多さから「八百万の神」と呼ばれ、人々は畏敬の念を持って自然と接していました。やがて、それらの神々は人と同じような姿や思考を持つと考えられるようになり、『古事記』や『日本書紀』にみられるような壮大な神話へとつながっていきます。

中でも有名なのが、八岐大蛇（やまたのおろち）伝説です。『古事記』や『日本書紀』には、表現の仕方などの多少の差異はありますが、スサノオノミコトが八岐大蛇を退治し、クシイナタヒメと結ばれた、と記されています。歴史書の神話では、そこから次のシーンへと移りますが、地域に根差した神話が多く集められた『出雲国風土記』では、結ばれた後の神々の様子や、どこでどんな神がどんなことをしていたのかなどを、各地の地名の由来から知ることができます。

例えば、雲南市の佐世（させ）という地域は、スサノオノミコトが「させの木の葉」を頭にさして踊ったという逸話が残されています。雲南市熊谷（くまたに）は、クシナダヒメが子どもを産む際にこの地を訪れ、「ここはとてもくまくましい（谷が入り組んでいる様を表す言葉）」と言ったことから熊谷と名付けられました。秋には紅葉が美しい奥出雲町の恋山（したいやま）は、その山に住む女神を恋慕ったサメが、求婚するために川を遡るも、女神に巨岩で川をふさがれてしまい会うことは叶わなかったという言い伝えから、「恋山」と書いて「したいやま」と呼ばれるようになったといいます。また、「したう」という言葉は、古代には葉が赤く染まるという意味もあったため、伝説と実際の景観を合わせたダブルミーニングの名前になっています。

ちなみに、他の地域で書かれた風土記にも地名の由来は書かれていますが、「スズメが生息しているからスズメ島」のような単純なものが多く、地名起源の約9割が神々の物語から語られる『出雲国風土記』は異彩を放っています。

1300年前から途絶えることなく今に伝わる神々を身近に感じる特別な場所

『出雲国風土記』に記されている中で、注目すべき神話の1つが琴引山にまつわる神話です。出雲国をつくった神であるオオアナモチノミコト（オオクニヌシノミコト）の琴があったため、「琴引山」と呼ばれるようになったといいます。神の琴とは、大きな岩のことだといわれています。琴は単なる楽器ではなく、神を呼び寄せる祭具として捧げられたり、異性を惹きつける力があるとされたりと、古から特別な楽器として扱われていました。琴引山では、琴に見立てられたであろう巨岩が現在も残っています。

このように、雲南地域の地名には、悠久の時を経ても途絶えることのない神々への想いが、今もなお受け継がれており、1300年前から神をいつも身近に感じていた特別な地域だったということが分かります。

関連スポット

天が淵

伝説に登場する八岐大蛇の住処とされる場所です。戦国時代の1572年につくられた『天淵八叉大蛇記』という本に書かれています。斐伊川上流に位置し、現在は静かな流れをみせています。

八重垣大明神

佐白（さじろ）・八頭（やと）

長者屋敷跡や鏡ケ池、元結掛松、伊賀武神社、八重垣大明神（旧社地）など、八岐大蛇伝説の伝承地が集中している地域です。江戸時代中ごろに作られた『雲陽誌』という地誌にも記されています。

琴引山

この山の名は『出雲国風土記』によると、「天下をつくった神様」とされるオオアナモチノミコトの琴があることから名付けられたとされています。ここでは大神岩などを見ることができます。

世代を超えて地域で守る

case.2　神社と氏子

雲南地域には、古くからの神社が数多く残っています。神社は、氏子と呼ばれる地域住民の生活の中心に位置づけられています。神社は神職を中心に護持され、氏子たちは神社の清掃や修繕、授与所でのお守りの授与など、日常の一部として神社を支えています。氏子たちの生活のかたわらには神社の存在があり、神々への信仰と日常の生活における祈りや感謝といった感覚を継承しているのです。

その一つが雲南市にある須我神社です。スサノオノミコトが八俣大蛇（やまたのおろち）を退治した後、クシイナタヒメノミコトとこの地に至り、初めて宮造りをした神社と伝わり、多くの人々の信仰を集めています。ここでも、氏子の世代交代の中で、ベテランの氏子と若い世代の氏子たちが協力しながら神社の護持に努めています。

Living with the gods　神話とともに暮らす人々

神話が息づく雲南地域では、人々の日々の生活に、神々との深い関わりが感じられる習慣や技術が今も残っています。
暮らしの中に神話を伝える、雲南地域の人々の習わしを紹介します。

代々受け継がれてきた
しめ縄づくりの技術

昭和30年 神楽殿大しめ縄 制作過程

case.1　しめ縄づくり

出雲大社に奉納される大しめ縄は、1955年ごろから飯南町でつくられてきました。長さ13.6m、重量5.2tの日本最大級ともいわれる大しめ縄は、1年以上の歳月と延べ1000人の町民の手によってつくられ、出雲大社神楽殿に奉納されています。飯南町では稲作が盛んで、雪が降って農作業ができない冬期の収入源としてしめ縄作りが始まりました。この地域では、しめ縄づくりが人生の中で習得すべき技術としてとらえられ、経験者から若手へと継承されてきました。

雲南市

美しい八重の雲が宮を包む
『古事記』に記された日本初之宮

『古事記』や『日本書紀』に記されている「須賀宮（すがのみや）」は、須我神社のことだとされています。スサノオノミコトが宮造りした際、美しい八重の雲が宮殿を取り囲むように立ち上ったといい、その情景を詠んだ歌は日本最古の和歌とされています。奥宮にある大小三つの岩倉は寄り添う親子のように見え、訪れる人を神秘の世界に引き込みます。また、三種の神器の一つである天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）は、この地から献上されたという言い伝えもあります。悪切り開運・良縁結びなどの御利益を求めて、たくさんの人が参拝に訪れています。

須我神社
参拝

島根県雲南市大東町須賀260

飯南町

霊験あらたかな名峰
神聖な巨岩を巡る登山

標高1,014mの琴引山は、『出雲国風土記』でオオクニヌシノミコトの琴があると記されていたことから名付けられました。山頂付近にはオオクニヌシノミコトを祀る琴弾山神社があり、チリケ封じ（幼児のひきつけ予防）や子どもの病気平癒にご利益があるとされています。神社の前にそびえる「石神」とされる巨岩、また、中腹には、琴が納められていると伝わる大神岩や穴神琴（あながみこと）弾岩（びきいわ）など神聖な巨岩を巡ることができます。山頂までは登山ルートが整備されているので、初心者でも安心して登ることができます。

琴弾山神社
登山

島根県飯石郡飯南町佐見

体験スポット Experience

普段の暮らしの中で神々の息吹を伝える雲南地域。
古代から現代へとつながる神話の世界が感じられる体験スポットがたくさんあります。

飯南町

日本一の大しめ縄が誕生する工房
職人の手ほどきで、しめ縄づくりを体験

しめ縄づくりの技術と伝統が、今なお、受け継がれている飯南町。大しめなわ創作館では、日本最大級とされる出雲大社神楽殿の大しめ縄をはじめ、全国各地の大しめ縄の生産を行っています。館内では島根県の特徴的なしめ縄の展示を見る事ができるほか、しめ縄専用に栽培された稲わらを使って、しめ縄づくりを体験できるコーナーが用意されています。工房では、熟練の職人技を間近で見学することができます。神棚用のしめ縄のほか、お土産用のかわいいしめ飾り、年末には伝統のしめ飾りの販売も行っています。

大しめなわ創作館
しめ縄づくり体験

島根県飯石郡飯南町花栗54-2

雲南市

茅葺屋根の家で舞う神楽
暮らしの中で支えられてきた神への舞

神楽、それは神々に捧げる舞。雲南市大東町では、正月のとんどさんで当屋となった家の座敷に、その年の福徳を司る神である歳徳神（としとくじん）を招いて、地域の家内安全や五穀豊穣を祈る神楽を舞う習わしがありました。須我神社のすぐ近くにある「神楽の宿」は、地域の人々が長い間暮らしの中で支えてきた神楽を貴重な民俗資料としてとらえ、座敷で行う神楽を保存・再現するために造られました。茅葺屋根の建物で、毎年7月には夜神楽大会が開催されるほか、希望すれば神楽の上演を楽しむことができます（有料／要予約）。

神楽の宿
神楽鑑賞

島根県雲南市大東町須賀375-1

Yamata-no-Orochi

八岐大蛇伝説

『古事記』と『日本書紀』に登場する八岐大蛇伝説では、スサノオノミコトが斐伊川上流の鳥髪（現在の船通山）に降り立ち、娘のクシイナタヒメを囲んで泣いている老父と老婆を発見します。スサノオノミコトが泣いている理由を尋ねると、八岐大蛇に娘を食べられてしまうのが悲しい、とのことでした。八岐大蛇は、一つの胴体に八つの頭、八つの尾を持ち、目はホオズキのように真っ赤な巨大な怪物です。スサノオノミコトは「あなたたちの娘をくれるなら、八岐大蛇を退治してやろう」と言いました。

スサノオノミコトは、強い酒を用意して八岐大蛇がやってくるのを待ちます。姿を現した八岐大蛇は酒を飲み、酔っぱらって寝てしまいました。その時、スサノオノミコトが刀を振りかざし、八岐大蛇を切り刻むと、尻尾から剣が出てきました。この剣が天叢雲剣です。

八岐大蛇伝説は一説によると、斐伊川や鉄づくりのことを表しているとされています。『出雲国風土記』に八岐大蛇伝説は記されていませんが、現在の奥出雲町について「ここでつくっている鉄は硬くていろいろな道具を作るのに適している」と書かれていたため、この地域で古くから鉄づくりをしていたことは確かです。後にたたら製鉄が盛んに行われる雲南地域には、八岐大蛇伝説の伝承地がたくさんあり、スサノオノミコトが八岐大蛇を成敗して天叢雲剣を手に入れた斐伊川の上流では、鉄づくりの伝統が受け継がれています。

Kotobiki

琴引神話

「此の山の峯に窟あり。裏に所造天下大神の御琴あり。（中略）故、琴引山と云う」。『出雲国風土記』は、琴引山の山名の由来をオオクニヌシノミコトの琴が納められているからと記載しています。オオクニヌシノミコトと琴の関係について『古事記』は次のように記しています。「スサノオノミコトの娘スセリビメノミコトと恋に落ちたオオクニヌシノミコトは、スサノオノミコトが与える試練を乗り越え、スサノオノミコトが眠っているすきに、大刀、弓矢、琴を奪い、逃げました。オオクニヌシノミコトは兄弟たちを追い払うと、地上世界の王となりました。」古代、琴は神の意を伺う神器であったとされ、古事記のエピソードは、スサノオノミコトからオオクニヌシノミコトへの権力の移譲を象徴しているとも言われています。オオクニヌシノミコトにとって「琴」がいかに重要なアイテムであったかが伺われます。その後の物語を、地元ではこう伝えています。「地上世界の王となったオオクニヌシノミコトはスセリビメノミコトとともに琴引山に登り、琴を奏でながら国づくりの考えを巡らせました。二人は山頂から出雲国を見渡し、これから鎮まる場所を、現在の出雲大社の場所に定めました。」オオクニヌシノミコトと琴引山のつながりの深さを物語る琴引神話ですが、琴引山は、縁結びの会議を行うために出雲大社へ集う全国の神々が降臨する山としても知られています。出雲地方で神在月と呼ばれる旧暦の10月、出雲大社を目指す八百万の神々は、出雲国の目印として琴引山へ降臨、神々はその後、この山を源とし、出雲大社近くの日本海へ注ぐ神戸川を頼りに、神迎え神事が行われる稲佐浜へ到達すると言い伝えられています。こうした伝承にちなんで、毎年秋分の日、琴引山山頂では、山を清める神迎え神事が行われ、多くの参拝者で賑わいます。

日本で唯一たたら製鉄技術が継承されている「日刀保たたら」
（公益財団法人日本美術刀剣保存協会提供写真）

Tatara Iron Production

たたら製鉄から読み解く雲南地域

たたら製鉄――。それは砂鉄を原料とした日本独自の製鉄技術です。
出雲を含む中国地方では、かつて、たたら製鉄が盛んに行われており、
最盛期には国内の鉄生産の大部分を担っていました。
その中でも代表的な鉄の産地であった雲南地域には、たたら製鉄の影響が
美しい景色や奥深い文化として今も色濃く残っています。

玉鋼
たたら製鉄で作られた純度の高い、
良質な鉄で、日本刀の素材に用いられる

日本列島で鉄をつくり始めたのは、6世紀後半。当初は朝鮮半島の製鉄技術に倣い鉄鉱石を原料としていました。しかし、日本列島では鉄鉱石が乏しかったため、より広い地域で豊富に得られる砂鉄を原料として製鉄技術が発展していきました。

雲南地域では、6世紀終わりごろから砂鉄を用いて鉄生産をはじめました。奈良時代（8世紀）に編さんされた『出雲国風土記』にも鉄づくりに関する記述が見られます。そして、平安時代末ごろ（11世紀）から鉄生産は活発になり、室町時代（14世紀）には国内有数の鉄産地に成長しました。その背景には、雲南地域では良質な砂鉄を含む地質や、木炭の生産に必要な森林に恵まれていたこともありますが、そのほかに、技術改良によって鉄が量産されるようになったことや、つくられた鉄が広く流通する仕組みができあがったことも考えられます。

江戸時代には、さらに製鉄技術が大きく発展しました。大型の炉に天秤鞴（てんびんふいご）で効率的に送風し、1回の操業で10数tの砂鉄と木炭を費やして、3t以上の鉄がつくられるようになりました。また、山から切り崩した土砂を水に流して、比重の大きな砂鉄を集める「鉄穴（かんな）流し」という技法や、たたらでできた様々な鉄を軟らかく、ねばりのある鉄素材に加工する「大鍛冶（おおかじ）」の技術も確立しました。こうして鉄づくりに関わる一連の技術体系が完成し、出雲のたたら製鉄は最盛期を迎えます。

ところが、明治維新以降、海外から安価な洋鉄が輸入されるようになり、たたら製鉄は徐々に衰退しました。大正12年（1923）に操業が一旦途絶え、その後、戦時中に再開されたものの、終戦とともにまた停止されました。しかし、日本刀には、たたらで作られた玉鋼が欠かせないことから、昭和52年（1977）にたたら製鉄は復活されました。現在は、公益財団法人日本美術刀剣保存協会が運営する奥出雲町の日刀保たたらで、唯一、たたら製鉄の技術が受け継がれています。

鉄づくりの歴史とともに育まれた文化と美しい景観

江戸時代以降、たたら製鉄が大がかりになると、たたら場を固定して、一か所で長期間操業するようになりました。たたら場には、製鉄を行った高殿（たかどの）のほか、事務所の元小屋（もとごや）や、製鉄作業にたずさわった労働者たちの住居などが設けられ、山内（さんない）と呼ばれる集落が形成されました。雲南市吉田町にある菅谷（すがや）たたらは、山内の景観をよくとどめており、往時の様子が偲ばれます。

たたら場や広大な山林を所有し、多くの労働者を従えて、製鉄業を営んだ人を鉄師（てっし）といいます。出雲地方の鉄師の中でも特に有力だったのが、雲南市吉田町の田部家、奥出雲町上阿井の櫻井家、同町大谷の絲原家で、「鉄師御三家」と呼ばれています。

田部家は、菅谷たたらなど複数のたたらを経営したほか、吉田町に大鍛冶屋と本宅を設けて経営拠点としました。いわば企業城下町のようなかたちで発展した吉田町の中心部には、田部家の土蔵群が建ち並んでおり、当時の繁栄ぶりを物語っています。

櫻井家は、上阿井の内谷に大鍛冶屋と本宅を置いて、製鉄業を営みました。ここには、今も櫻井家住宅の建物や土蔵が建ち並んでいます。松江藩主の来訪に際して造られた御成門（おなりもん）や庭園もあり、藩主と鉄師のつながりを示しています。

絲原家は、鉄穴（かんな）たたらの山内に居宅を設けて経営拠点としました。現在、高殿は残っていませんが、住宅の建物や、土蔵、金屋子（かなやご）神社などから、鉄師の繁栄ぶりや山内の様子がうかがわれます。

このほかにも、飯南町では、志津見ダムの建設に伴って行われた発掘調査で、中世から江戸時代までの製鉄遺跡が数多く発見されました。これらの調査によって、製鉄作業場の様子や、時代を追って技術が発展していく過程が明らかになりました。弓谷（ゆんだに）たたら跡では、江戸時代の大規模な製鉄炉の地下構造が見つかり、たたら場の建設に膨大な労力が注がれたことがわかります。

以上のように、たたら製鉄に伴ってつくられた集落や建造物、遺跡などから、雲南地域では鉄づくりは人々の暮らしと密接な関わりを持ち、豊かな文化を生み出したことがわかります。

鉄師御三家に関わる文化財

田部家　田部家土蔵群

吉田町の中心部にある田部家の本宅前には、米、文書類などを保管した美しい白壁の土蔵14棟が整然と立ち並び、当時の繁栄ぶりを物語っています。往時をしのびながら、ゆったりと散策を楽しむことができます。

櫻井家　櫻井家住宅

元文3年（1738）に建てられた主屋など、多くの建物が国の重要文化財に指定されています。また、国の名勝である庭園には上流の川から引き込んだ滝があり、松平不昧公によって「岩浪（がんなみ）」と名付けられました。隣接する可部屋集成館には櫻井家に伝えられた数多くの資料や美術工芸品が展示されています。

絲原家　絲原家住宅

大正13年（1924）に完成した主屋や、土蔵、金屋子神社など、鉄師居宅の佇まいを今に伝えており、国の登録有形文化財に登録されています。また、絲原記念館には、たたら関連資料のほか、松江藩主の御成に際しての調度品なども展示されています。

奥出雲町 鉄穴流し跡地に造られた追谷地区の棚田

話してくださった方

島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員
東山（ひがしやま） 信治（しんじ） 氏

たたら製鉄は、奥出雲の一大産業として人々の暮らしを支えるとともに、地域の文化や景観にも大きな影響を及ぼしました。鉄づくりの歴史とともに培われた文化や美しい風景を、多くの方に堪能していただきたいと思います。

TOPICS

鉄穴流しの跡地を棚田に造りかえ、
採掘のために導いた水路やため池を再利用するなど、
独自の土地利用により稲作や畜産を中心とした
複合的な農業が営まれてきました。

日本農業遺産

Japanese Nationally Important Agricultural Heritage Systems

たたら製鉄に由来する奥出雲の資源循環型農業

たたら製鉄と関係の深い棚田でコメなどを生産している奥出雲地域の「資源循環型」の農業が、2019年2月に国が認定する「日本農業遺産」に認定されました。

たたら製鉄と奥出雲の農林畜産業

たたら製鉄は、単に良鉄をつくり出しただけではなく、土地利用や地域の景観にも大きく関わりました。砂鉄採取のために山々を切り崩して鉄穴流しが行われましたが、その跡地は棚田に造りかえられました。そして、たたら製鉄を背景に、砂鉄・木炭や鉄の運搬用と農耕用の牛馬の飼育が盛んになり、現在の「奥出雲和牛」生産の基礎を築きました。優秀な系統を引き継ぐ和牛改良にあわせ、牛ふんや山草など有機質堆肥を水田に施用する耕畜連携により、地域ブランド米「仁多米」を生産し、資源循環型の農業システムが営まれています。かつて燃料であった木炭生産の薪炭林から、現在ではシイタケ等の原木供給林として森林資源を循環利用し、伐採跡地の焼畑や鉄穴流しの跡地で栽培されてきた在来ソバが保存・継承され、奥出雲地域では自然と共生した農業を通じ、高品位な農産物を育んでいます。こうした、たたら製鉄によって築かれた棚田をはじめ、砂鉄採取のために導いた水路やため池を再利用するなど独自の土地利用により稲作や畜産を中心とした複合的農業が営まれ、四季折々の棚田景観を形成し、これらの里山環境には多様な動植物が育まれています。

［日本農業遺産とは］日本農業遺産は、わが国において重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域（農林水産業システム）を農林水産大臣が認定する制度です。

オオサンショウウオ

資源を循環させながら、美しい自然を次の世代へ

夏は涼やかな風が吹き、秋には黄金色の稲穂が揺れる。奥出雲に広がる美しい棚田の風景。もし、砂鉄を採掘した跡をそのままに放置していたらどうなっていたのでしょうか。今の自然豊かな景観は、きっと見られなかったでしょう。この土地の人々は、山を切り崩した時代の記憶をとどめながら、少しずつ緑を甦らせてきました。

砂鉄を採掘した後の土壌には養分が少なく、稲作には不向きであったため、まずはソバなどを栽培することで土壌を改良し、鉄製品の運搬用に多く飼育されていた和牛のふん、山草などを堆肥化して土壌を豊かにしてきました。そのような歴史的風土と合わせ、現在、良質米の産地として高い評価を受けています。

たたら製鉄に由来する農・林・畜産業が自然を大切にしながら営まれ、資源循環型農業によって、人々の暮らしと多様な生物資源が守られることで、人間の文明と自然は共存できるのです。奥出雲の美しい棚田の風景は、私たちにそんな希望を与えてくれています。

Living with nature　自然とともに暮らす人々

奥出雲地域では、たたら製鉄の原料である砂鉄を採取した跡を美しい棚田に再生し、
今も資源循環型の農業を続けています。

自然の恵みに感謝して、先人の知恵を今に生かす

case.3　農家

先人の知恵を今に引き継ぐ資源循環型農業は、地域の人々により守り伝えられています。米づくりと和牛繁殖、林業インストラクターも行う専業農家の響繁則（ひびきしげのり）さんは、若者や子どもたちに森林や山野、田んぼのつながり、自然との共生の大切さを伝え、「昔からの積み重ねによって今がある。人と人がつながって知恵や技術を共有していくことが大切」と語ります。

有機農業で米とエゴマをつくる松原康夫さんは、水がきれいな川に住むオオサンショウウオの保護活動に取り組んでいます。地域の人たちと一緒に河川の環境を整備したり、子どもたちを対象にした観察会を開いたりして、オオサンショウウオを「地域の宝」として守る活動を広め、「未来へ、美しい環境と生態系を残したい」と呼びかけます。

食事の合間に食べる田舎料理「はしま」

奥出雲町

日本が誇る伝統の美しさを今に伝える 日本刀鍛冶の匠の技を間近で見る

奥出雲町は、日本刀の原料になる玉鋼を生産するため、古代から現在までたたら製鉄が行われ続けている世界唯一の地域です。「奥出雲たたらと刀剣館」は、奥出雲町のたたら製鉄について総合的に展示・紹介している施設で、実物大で迫力のあるたたら炉断面模型があります。たたら吹きで使われた吹子（ふいご）の実物模型が3種類あり、当時のたたら操業の一端を実際に体験できます。また、刀匠による日本刀鍛錬の実演もあり、日本刀や刀工に興味のある方にオススメです。

奥出雲たたらと刀剣館

日本刀鍛錬実演・博物館見学

島根県仁多郡奥出雲町横田1380-1

雲南市・奥出雲町

トロッコ列車で 雄大な景色と地元産グルメを満喫

中国地方有数の山岳鉄道であるJR木次線の木次駅～備後落合駅間を走る「奥出雲おろち号」は、2両編成のトロッコ列車です。解放感いっぱいの列車で、新緑の春から紅葉の秋までの間、車窓からは斐伊川の流れに沿って奥出雲の雄大な景色が楽しめます。また、停車する駅では、奥出雲和牛焼肉弁当や笹ずし、そば弁当、アイスクリーム、カスタードプリンなど、地元産のおいしい食材を使ったお弁当やデザートが販売され、列車の旅を満喫しながら味わうことができます。

JR木次線トロッコ列車「奥出雲おろち号」

列車旅

体験スポット Experience

普段の暮らしの中で神々の息吹を伝える雲南地域。
古代から現代へとつながる神話の世界が感じられる体験スポットがたくさんあります。

奥出雲町

出雲杜氏が醸す老舗の日本酒 清らかな水と厳選した酒米を使用

奥出雲町に蔵を構える創業300余年の老舗酒造会社。歴代の出雲杜氏によって、味わい重視の日本酒を醸し続けています。出雲杜氏は、かつては農家の閑散期（冬季）の仕事として酒蔵に出稼ぎに訪れていた人たちを主流とした杜氏のことで、昔ながらの酒造りの技術を今に伝えています。簸上清酒合名会社では、日本刀の原料“玉鋼”の名を冠した「大吟醸　玉鋼」をはじめ、奥出雲の清らかな水と厳選された酒米を使った日本酒を造っています。

簸上清酒合名会社（ひかみせいしゅ）

日本酒

島根県仁多郡奥出雲町横田1222

雲南市

たたら製鉄が隆盛を極めた時代を偲（しの）ぶ 世界で唯一現存する高殿たたら

国の重要有形民俗文化財に指定されている菅谷たたら山内（さんない）には、たたら製鉄に従事する人たちが暮らしていた家並みや、たたらの操業・経営に関する建物が保存・復元されており、当時の様子を知ることができます。その中の一つが、世界で唯一現存する高殿たたらです。宝暦元年（1751）から170年間にわたって操業が続けられました。この施設は、映画「もののけ姫」のたたら場のモデルになったともいわれています。高殿の中に足を踏み入れると、復元された製鉄炉のほか、砂鉄・炭の置き場、職人たちの休憩所などが見られ、当時の人々の息づかいが感じられます。

菅谷たたら山内 高殿

施設見学

島根県雲南市吉田町吉田4210-2

掲載施設一覧＆アクセス

P1 ……大万木山
飯石郡飯南町頓原

P3 ……八重滝
雲南市掛合町入間

P5 ……斐伊川堤防桜並木
雲南市木次町木次

P6 ……鬼の舌震
仁多郡奥出雲町三成宇根

P6 ……天が淵
雲南市木次町湯村

P6 ……佐白・八頭
仁多郡奥出雲町佐白

P6 ……琴引山
飯石郡飯南町頓原

P9 ……須我神社
雲南市大東町須賀260

P9 ……大しめなわ創作館
飯石郡飯南町花栗54-2

P10 ……琴弾山神社
飯石郡飯南町佐見

P10 ……神楽の宿
雲南市大東町須賀 375-1

P14 ……日刀保たたら
仁多郡奥出雲町大呂529

P15 ……田部家土蔵群
雲南市吉田町吉田

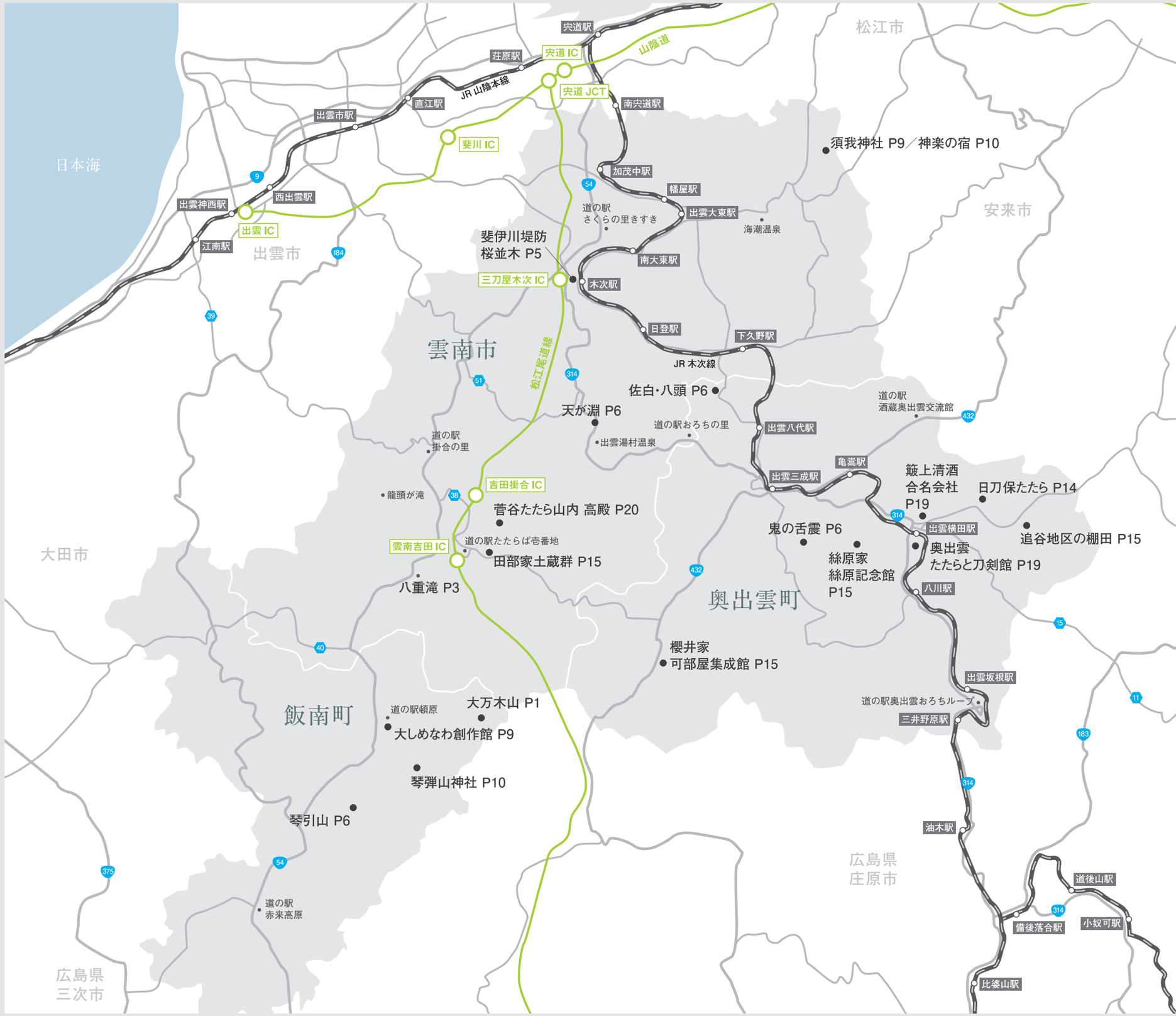
P15 ……櫻井家／可部屋集成館
仁多郡奥出雲町上阿井1655

P15 ……絲原家／絲原記念館
仁多郡奥出雲町大谷856

P15 ……追谷地区の棚田
仁多郡奥出雲町追谷

P19 ……奥出雲たたらと刀剣館
仁多郡奥出雲町横田1380-1

P19 ……簸上清酒合名会社
仁多郡奥出雲町横田1222

P20 ……JR木次線トロッコ列車「奥出雲おろち号」

P20 ……菅谷たたら山内 高殿
雲南市吉田町吉田4210-2